

(3) 小 児 科

1. 研修目標

小児科及び小児科医の役割を理解し、以下の小児医療を適切に行うために必要な基礎知識・技能・態度を修得する。

- (1) 小児の特性を学ぶ。
- (2) 小児の診療の特性を学ぶ。
- (3) 小児期の疾患の特性を学ぶ。

2. 研究指導体制

- (1) 病棟
指導医とともに入院患者を受け持ち、その診療にあたる。
- (2) 外来
指導医の下、外来患者の医療面接及び診療の実際を学ぶ。
指導医との討論を通じて鑑別診断及び治療法について修得する。
- (3) 当直
週1回程度の当直（急患センターを含む。）を指導医とともに経験し、小児救急患者の診療を学ぶ。
- (4) 発表
週1回の診療討議会において症例の報告とそれについての考察を行う。
同じく抄読会において小児科やその関連領域のトピックについて調べ、紹介する。

3. 研修指導責任者

研修指導責任者 森内 浩幸

4. 研修内容

- (1) 医療面接及び病歴の聴取法（保護者の心理を把握して、適切な病歴を得る。）
- (2) 診察の仕方（小児の特性を理解し、正しい手技による診察法を修得する。）
- (3) 診断の進め方（患児の問題点を正しく把握し、適切な問題解決能力を修得する。）
- (4) 臨床検査、放射線検査の指示と実施
- (5) 基本的診療手技の実施（採血など）
- (6) 治療法の選択及び決定（患者の性・年齢・重症度に応じた適切な治療計画をたて実施できる。）
- (7) チーム医療の理解と他科医との連携

5. 研修到達目標

5-1 行動目標

- (1) 良好な病児 家族（母親） 医師関係の確立
- (2) チーム医療の実践
- (3) 問題対応能力（problem-oriented and evidence-based medicine）の修得
- (4) 感染対策、特に小児病棟に特有の感染症とその対策について理解し、対応できるよう安全管理の方策を身につける。

5-2 経験目標

- (1) 医療面接・指導
 - ・小児ことに乳幼児に不安を与えないように接し、保護者（母親）に対して指導医とともに、適切な病状説明を行い、療養指導ができるようになる。
- (2) 診察
 - ・小児の身体計測から、身体発育、精神発達、生活状況などが、年齢相当のものであるかどうかを判断できるようになる。
 - ・小児の全身を観察し、その動作・行動、顔色、元気さ、発熱の有無・食欲の有無などから、正常な所見と異常な所見、緊急に対処が必要かどうかを把握して提示でき

るようになる。

- ・小児疾患の理解に必要な症状と所見を正しくとらえ、理解するための基本的知識を修得し、主症状及び救急の状態に対処できる能力を身につける。

(3) 臨床検査

- ・医療面接や理学的所見から得た情報をもとに病態を把握し、診断や病状の程度を確定するために必要な検査を選択施行し、その検査結果を解釈できるようになる。

(4) 基本的手技

- ・小児ことに乳幼児の検査及び治療の基本的な知識と手技を身につける。

A：必ず経験すべき項目

- ・単独または指導者の下で乳幼児を含む小児の採血、皮下注射ができる。
- ・指導者の下で新生児、乳幼児を含む小児の静脈注射・点滴静注ができる。
- ・指導者の下で輸液、輸血及びその管理ができる。

B：経験することが望ましい項目

- ・指導者の下で導尿ができる。
- ・指導者の下で注腸・高圧浣腸ができる。
- ・指導者の下で胃洗浄ができる。
- ・指導者の下で腰椎穿刺、骨髄穿刺ができる。

(5) 薬物療法

- ・小児に用いる薬剤（輸液）の知識と使用法、小児の体重別・体表面積別の薬用量の計算法を身につける。

(6) 成長発育に関する知識の修得と経験すべき症候・病態・疾患

1) 成長・発育と小児保健に関わる項目

- ① 乳幼児期の体重・身長増加と異常の発見
- ② 予防接種の種類と実施方法及び副反応の知識と対応法の理解
- ③ 発育期に伴う体液生理の変化と電解質、塩酸基素平衡に関する知識
- ④ 神経発達の評価と異常の検出

2) 一般症候

- | | |
|----------------|---------------|
| ① 体重増加不良、哺乳力低下 | ⑪ 頭痛 |
| ② 発達の遅れ | ⑫ 咽頭痛、口腔内の痛み |
| ③ 発熱 | ⑬ 咳、喘息、呼吸困難 |
| ④ 脱水、浮腫 | ⑭ 頸部腫瘍、リンパ節腫瘍 |
| ⑤ 発疹、湿疹 | ⑮ 鼻出血 |
| ⑥ 黄疸 | ⑯ 便秘、下痢、血便 |
| ⑦ チアノーゼ | ⑰ 腹痛、嘔吐 |
| ⑧ 貧血 | ⑱ 四肢の疼痛 |
| ⑨ 紫斑、出血傾向 | ⑲ 夜尿、頻尿 |
| ⑩ けいれん、意識障害 | ⑳ 肥満、やせ |

3) 経験すべき疾患

- a. 新生児疾患
- b. 乳児疾患
- c. 感染症
- d. アレルギー性疾患
- e. 神経疾患
- f. 腎疾患
- g. 先天性心疾患
- h. リウマチ性疾患
- i. 血液・悪性腫瘍
- j. 内分泌・代謝疾患
- k. 発達障害・心身医学

(7) 小児の救急医療

- ・小児に多い救急疾患の基本的知識と手技を身につける。
 - a. 脱水症の程度を判断でき、応急処置ができる。
 - b. 喘息発作の重傷度を判断でき、中等症以下の応急処置ができる。
 - c. けいれんの鑑別診断ができ、けいれん状態の応急処置ができる。
 - d. 腸重積症を正しく診断して適切な対応がとれる。
 - e. 虫垂炎の診断と外科へのコンサルテーションができる。
 - f. 酸素療法ができる。
 - g. 気道確保、人工呼吸、胸骨圧迫式心マッサージ、静脈確保、骨髄針留置、動脈ラインの確保などの蘇生術が行える。

6. コース別カリキュラム

- (1) 1か月コース：外来研修、病棟研修、救急医療を通して、小児医療の特性についての基本的な考え方を身につけ、基本手技及び救命救急処置を修得する。
- (2) 3か月コース：上記の研修到達目標をできる限り達成できるように、主治医の一員として外来研修、病棟研修、救急医療に従事する。さらに、長期療養入院の慢性患者や障害者の医療を研修するために、研修期間中に重度心身障害者施設等（国立療養所長崎病院、県立こども医療福祉センター）に出向し、その診療にあたる。